

「折口信夫『生き口を問ふ女』と大阪言葉」の概要

上野 誠*

奈良大学研究助成「奈良と折口信夫―大阪との比較から―」の研究
 成果については、すでに論文「折口信夫『生き口を問ふ女』と大阪言葉」
 (谷口貢・鈴木明子編『民俗文化の探究 倉石忠彦先生古稀記念論文集』
 岩田書院、二〇一〇年)として発表している。ここに要旨を掲載
 して、さらには今後の展望について記して、研究の報告としたい。

折口信夫の研究の特色は、なんとといっても、その広さにある。連記
 すれば、

- ①独自の発生論から日本の古典を俯瞰する国文学研究
- ②神観念や他界観念を通じて日本人の内奥を見通した民俗学研究
- ③身体の日本美とその伝承のありようを探る芸能研究
- ④日本語の特性に肉薄しようとした国語学研究
- ⑤日本人の倫理や道徳の背後にある宗教的感性を探る宗教研究
- ⑥日本人の、それも庶民の宗教的エネルギーを民俗学の方法でとらえ
 ようとした神道研究

- ⑧自らの学問的実感を物語として表現する小説
- ⑨さりげない行動や言葉の背後にある思惟をとらえる珠玉の評
 論

(上野誠『魂の古代学―問いつづける折口信夫』新潮社、
 二〇〇八年)

となる。しかし、それは個別に成り立っているのではなく、相
 互に連動しながら、一つの学問体系をなしているのであって、
 世評に「折口学」と称する向のあるのは、そのためである。い
 わゆる「折口学」の方向性は、近代国民国家の基礎にあるもの
 として認識されていた「日本的なるもの」の追究にあつたし、
 初期民俗学の影響を強く受けた靈魂論による日本文化理解にあ
 るといえるだろう。

こういった折口の学問の故郷を挙げるならば、沖縄であつた
 り、いわゆる三信遠国境地帯だったりするわけであるのだが、

もう一つ忘れてはならない土地がある。それは、生まれ育った大阪であり、尊敬していた祖父ゆかりの地である奈良である。大阪の木津は生家のある地であり、折口の学問は敷田年治をはじめとした大阪の国学者の影響を受けている側面がある。したがって、折口の学問の故郷として大阪を考えることもできる。けれども、故郷大阪ということでは、折口の語る大阪は、商人の街であり、芝居の街である。そして、なによりも幼少期を過ごした場所であった。折口自身の処女小説である「口ぶえ」を読むと、活き活きとした大阪言葉を語る登場人物たちのセリフ回しが絶妙である（『折口信夫全集』第二十七卷、中央公論社、一九九七年。初出一九一四年）。そこに描かれたのは、少年から大人へと脱皮する折口であり、いわば脱皮にともなう痛みのようなものが描かれている。

この小説「口ぶえ」は、落第をして失意のうちにある主人公・漆間安良が、祖父の地飛鳥坐神社に行き、祖先からの啓示を受けるといふ物語である。もちろん、落第したことも含め、漆間安良には、折口自身が投影されていることは、いうまでもない。つまり、折口にとつて、飛鳥は祖父ゆかりの地であるということができる。じつは、この飛鳥の国つ神を祀る飛鳥坐神社の社家に繋がる家の子であるという意識が、折口の学問の背景にあるのである。このことは、日本で最初の『万葉集』の全口語訳となった『口訳万葉集』の跋文にも記されている。飛鳥は自らの祖父ゆかりの地でもあり、学問の原動力を与えてくれる土地であり、憧憬する万葉びとの世界であった。折口の学問の中心に、

常に万葉研究があるのも、折口自身にとっては、自らの出自からの必然であったと考えなくてはならないのである。つまり、折口にとつて、祖父ゆかりの聖地として、奈良と飛鳥は捉えられているのである。

すると、天王寺中学で落第をして、自殺未遂をした少年がそのプライドを取り戻す物語である「口ぶえ」の舞台が飛鳥であるのも、これもまた当然ということが出来る。「口ぶえ」の中で、生れてはじめての一人旅の場所として飛鳥が選ばれ、祖先の啓示を受け、それに応答するところは、一つのこの小説の見せ場となっている。

対して、故郷大阪をあつかった小説では、自由闊達に大阪言葉が使われている。晩年、折口は、自分の大阪言葉は、明治の古い大阪言葉であることを語っているが、折口には自らの大阪の言葉に、相当の自負があつたものと思われる。大阪言葉の痴話喧嘩の部分を見てみよう。

早、檀那に、ほり出されて、乞食んでもなりくされ。
 ぞおれ。蛙は口からや。やつぱり檀那ぬかしたな。

困はれてたら、どないや。おまいらの世話にはなつてえへんぞ。
 なつてるとも・・・川卯之内は、かまの下の灰まで、こつちのものや。何程、ねらひさらしても、死な、あけんはい。わてが死んだ雖、四人の子持ちや。おのらは指もさ、れえへん。（欠）

（「生き口を問ふ女（続稿）」、『折口信夫全集』第二十七卷、中央公論社、一九九七年。一九二二年頃、草稿）

「生き口を問ふ女」は、大阪「にはか」仕立て小説であるが、そこには、大阪の生活者が使用している言葉への圧倒的なこだわりと、大阪言葉を大阪以外の読者にわからせようとする工夫があったと思われる。実際に、わからせるための工夫がルビでなされている。こういった大阪言葉へのこだわりは、小説細部のディテールの設定と連動している、一つの小説世界が造型されている、といえよう。激昂した感情を伝える下品な言葉を縦横無尽に作品に取り込み、その土地の生活者だけに流通している言葉の省略方法を振り仮名で示し、関西の劇場関係者のいわゆる「符牒」で、作品に臨場感を与えているのである。

折口は時場と結びついた言語でなくては、生活者の心性は掬い取れないと考えていたので、折口の最初の単行本となるいわゆる『口訳万葉集』は、実は大阪言葉訳『万葉集』という側面をもっているのである。このことについては、折口は、

評釈に用ゐた用語は、大体、標準語によつた積もりであるが、散文と違つて、律文では、情調を完全に表す為には、千篇一律に、である・でないで、おし通すことが出来ない。さうした間隙にもつて来て、わたし自身の語なる、大阪ことばの、割り込んで来たのも、随分あつたと思ふ。譬へば言つて・しまつてを、言つて・しまつて、知らない・取らないを、知らぬ・取らぬといふ類であるが、かういふ風に、この訳文に採り入れた、方言的の性質を帯びた語も、まんざら反省なしに用ゐた訣でもないのである。

（『口訳万葉集のはじめに』『全集』第九卷、中央公論社、一九九五年。
初出一九一六年）

と記している。折口は、万葉歌の情調を掬い上げるために、自分自身の言語である大阪言葉を採用することもあった、と述べているのである。それは、自身の言語を以つてしか、微細な情調をより正確に伝えられないと考えたからであろう。つまり、万葉歌を訳す場合、その情調にまで踏みこんで感覚的部分を伝えようとすると、訳者もつとも使い慣れていて言語感覚のある言葉を使用しないかぎり、正確に訳すことはできない、と考えていたのである。だから、大阪語訳なのである。こうしてみると、折口信夫研究を、大阪と奈良という土地の風土ないし磁場から、今後とも考究してゆく必要があるだろう。本研究を終え、私は次なる課題を以上のように考えている。

**The outline of “–Sinobu Orikuchi– Ikikuchi wo tou onna,
and the Osaka language”**

Makoto UENO